CHAPTER 23 2019年11月13日

WHY ENGAGEMENT?

A Second-Person Take on Social Cognition

はじめに

- 発達心理学での第1次社会的認知ブーム（1960〜1970年代）
  - PiagetやChomskyのアプローチ（個人主義、内面主義、非文脈性）を批判する。
    - LASS（言語獲得システム, Bruner）：個人の外側に言語獲得を支援するシステム（大人と子どもの会話）がある。
    - LAD（言語獲得装置, Chomsky）：個人の内側に言語獲得を支援するシステム（普遍文法）がある。
- 発達心理学での第2次社会的認知ブーム（近年）
  - 様々な言葉が使われている。
    - 「相互作用（interaction）」「二人称（second-person）」「エンゲージメント（engagement）」「子どもの指示性（child-directness）」「明示的な手がかり（ostensive cue）」「共有されたエンゲージメント（shared engagement）」「共同エンゲージメント（joint engagement）」「相互作用する脳（interactive brain）」……など。
  - しかし、社会的認知におけるこれらの役割はよくわかっていない。
    - それぞれの言葉の定義がよくわかっていない。
    - 60年代・70年代に批判していた内面主義（internalism）・非文脈性（acontextuality）の続きになっている。
- 本章の目的
  - 言葉の意味を解きほぐす。
  - 社会的認知において、社会を見る必要性を意識する（社会的認知は個人の中にあるのではなく、個人の外にある←4Eっぽい）。
- 筆者が主張する典型的な社会的認知の発達
  - 二人称的エンゲージメント（後述）
    - 他者との感情的な関わり（emotional involvement）：良いQOLを導く。
  - 相互作用（interaction）よりも感情的な質を捉えている言葉なので、「エンゲージメント」を使う。

WHAT IS ENGAGEMENT?

- エンゲージメント（感情的な関わり）：感情的なことが含まれている相互作用
  - 笑顔、冗談を言う、びっくりさせる……など。
  - 「単に」レジの人にお金を支払うだけとか、ドアを抑えてくれていた人にぼんやりと「ありがとうございます」と言うだけとかは、エンゲージメントとは言わない。

Is Engagement a Continuum or Category?

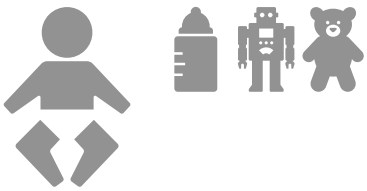
- エンゲージメントは連続的なもの。
  - 扉を開けて待ってくれていることに気づくには、ある程度の関心と意識が必要。
    - この意識には、あるレベルの情動性を含む。
    - カテゴリカルな情動ではなく、Stern（1985）の言葉で言うところの「活力のある情動（vitality affects）」。
      - 様々な程度と種類の感情的な関わりとしての、広い範囲の相互作用

Is Engagement Singular or Multiple?

- 複数のエンゲージメントの複雑さを理解し、測定することは非常に困難なことであると思われるので、論文上では単数のものとして扱う。
- 実際には、エンゲージメントは異なる程度の関わりで生じるだけでなく、異なる領域でも生じうる。まるで単数のように扱うことには限界がある。
  - 例えば、不運の最中にいて泣くのと同時に、まるで平凡な論理的問題であるかのようにその出来事の実用的な意味を考え抜くことができるだろう。

Does Engagement Occur not only with Persons but also with Objects?

- エンゲージメントはオブジェクトにも生じる（人とオブジェクトの区別に重きを置かない）。
  - 人とオブジェクトの区別は絶対ではない。人もオブジェクト（対象）。
  - 新生児でさえオブジェクトとのエンゲージメントに関心がある。



    - 注意を向ける、全身を動かす、振り回す……など。
    - 自身の行動が世界に与える影響に関心がある。
      - 視覚–運動協応、目の前の光景の変化を調べる（Van der Meer et al., 1995）。
      - このときの感情は、知覚されたオブジェクトに魅力を感じることや、「理解したい」と思うことを含む。

    - 物質世界ともエンゲージメントを持とうとする開放性（openness）の証拠
- 人同士と比べると豊かな相互作用を伴わないが、それでもエンゲージメントである。

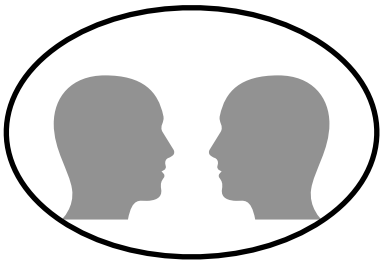
Can there be Engagement without Action?

- 最もインパクトがあって重大なエンゲージメントは、行為（action）を含んでいる。
  - 映画を見ているときに強く感情が揺さぶられるような、行為を伴わない感情的なエンゲージメントも、確かにエンゲージメント。
    - しかし、行為を伴わない感情的なエンゲージメントは、相互関係、シナリオのない発達（個性）、積極的な（行為を含む）エンゲージメントのもとで起こりうる結果を認めない。
  - 個性や感情的な関わりのような行為も、連続的なものである。

SO WHAT IS THE DIFFERENCE BETWEEN SECOND-PERSON AND THIRD-PERSON RELATIONS?

- エンゲージメントは、いろんな相互作用の中で起こりうる。
  - 議論を自分で考える。他者と 1 対 1 であったときに眉をひそめる。映画・ニュースの中の人物に共感して泣く。友人グループの楽しい雰囲気の中に入る。聞いている人を楽しませながら仲間と気の利いた冗談を交わす。
- エンゲージメントという言葉は、レベル、関係のタイプ、強さ、行為、モダリティの複雑さに悩まされる。

  - エンゲージメント沼
- エンゲージメント、二人称関係・三人称関係を考えることは、人の赤ちゃんにおける社会的認知の発達を理解するのに役立つか？（役立つと思うので以下で説明する）



- 二人称関係（second-person relation）：2人の相互作用
  - 他の人に話しかけられる経験、他の人から「あなた」だと見られる経験、私が他者を「あなた」として見ることで生成される相互作用の経験を含む（Buder, 1957）。
  - 相手について、分析的に考えることができる。
    - あの人またあれやってる。
    - なんであの人は私をバカにしたような行動を取るんだろう。

- 三人称関係（third-person relation）：2人＋それを見ている第三者の相互作用
  - 3人以上のグループでの態度。

    - より切り離した、観察に基づいた態度を含む。
        - 他者のことを「あなた」というよりも、「彼」「彼女」として見る（映画の登場人物をみているような感じ）。
- 二人称関係と三人称関係は、他者と向き合うときの開放性（openness）・閉鎖性（closed-ness）が違う（状況の構造が違うのではなく）。
    - あなたが他者に対して開示している程度・他者があなたに対して開示している程度が、二人称関係の線引き。
    - 閉鎖性は（二人称関係においてであっても）いろんな形で生じる。
        - （例）相手をラベル（集団カテゴリー）を通して見る。
- 二人称関係・三人称関係は、他者について異なる経験をもたらす。
    - 特に、二人称関係における相互作用の経験、感情のつながりが発達的に重要。
        - 二人称関係は、他者同士の相互作用を見ているとき（三人称関係）とは異なる感情的な反応を生じさせる。
        - 三人称関係も、他者の心を知覚できるようになるには必要（サリー・アン課題的な）。
    - 二人称関係・三人称関係は相互に影響し合う（それぞれ独立しているわけではない）。
        - 例えば、相手をからかったりするときは、二人称関係と三人称関係を素早く切り替える。
    - 他者をどのように経験するかは、その他者に対してどのようなエンゲージメントを持つかに依存する。
        - 乳児期における最も顕著な他者への接近は、他者が赤ちゃんに接近し、反応するエンゲージメント。
            - 赤ちゃんとの感情的な関わり。あやすこと。
- 最近の発達理論では、学習における子どもへの指示性（child-directedness）の重要性に挑戦している（Schneidman & Woodward, 2016）
    - これを考える利点は、子どもへの指示性それ自体ではなく、観察された入力（子ども自身が見聞きしたもの）と比べて子どもへの指示性（子どもに向けられた行為）に注意が向く可能性が高いことや、子どもへの指示性と同時に起こる学習をサポートするような他の特性にある。
    - この示唆は、二人称的状況と三人称的状況の違いを支持している。
        - いつも学習を助けるとは限らないが、子どもに向けられた行為は子どもにとって重要。
        - 子どもが多くの注意を獲得する（二人称的状況）ことで、単に状況を見ているだけ（三人称的状況）では得られない経験を得るかもしれない。
- 他者の心とのエンゲージメントを話すときは、注意と感情的な関連が中心となる。

EVIDENCE FOR THE POWER AND PRIMACY OF SECOND-PERSON RELATIONS

- 大人では、二人称関係にある相手からの働きかけを優先的に処理していることがわかっている。
  - 他者に話しかけられる（名前を呼ばれる）と、異なる神経プロセスを導き、知覚的な気づきを高める（Kampe, Frith, & Frith, 2003; Schilbach et al., 2006）。
  - 実験室でヘッドホンから聞こえる声を聞いているときでも、二人称関係にある人から呼ばれると、自分の声、三人称関係の人の声よりも優先して処理される（Herbert, Blume, & Northoff, 2015）。
  - 直視顔を見ると、逸視顔を見たときよりも正確に情動的な覚醒度を自己報告できる（Baltazar et al., 2014）。
- 大人と同じようなことが赤ちゃんにも起こるのであれば、早期の二人称的エンゲージメントは他者と自己の気づきを変化させる・高めるかもしれない。
  - 他者も自己も人として認識できるようになるかもしれない。
- 赤ちゃんにおける二人称関係に必要なものは何か？
  - 赤ちゃんは他者とのエンゲージメントにオープンである必要がある。
    - 興味を持つ
    - 他者に対して行動する能力がある
  - 赤ちゃんには赤ちゃんを人として認識する他者がいることが必要である。
    - 赤ちゃんと「あなた」として話しかけ、赤ちゃんの発信に対して反応する人
  - 赤ちゃんは他者の認識とそれに対する反応を認識できることが必要である。
    - 他者の行為を赤ちゃん自身と繋がった、関連のある反応として認識することができる
    - 相互的ですぐに応答してくれるエンゲージメントを追い求めることができる
- これらを支持する先行研究を紹介する。

Infant Openness to Engagement with Others

- 赤ちゃんには人間の顔や、顔のような配置をよく見る傾向があるし、注視時間も長い（Goren et al., 1975; Morton & Johnson, 1991）。
  - 生まれてすぐの赤ちゃんにもこの傾向は見られる。
  - 直視が好まれる。
  - どこかに視線を向ける前に赤ちゃんを直視すると、赤ちゃんがより正確に視線を動かすことができる（Farroni et al., 2004）。
- 直接的なコミュニケーションに対して選択的に注意を向けている。

  - 直接話しかけると、乳児においても（直接話しかけないときと比べて）異なる神経学的な効果があることがわかった（EEG、NIRS）。
  - 4ヶ月児において、直視と逸視では異なるガンマ帯域の振幅を見せる（Grossman et al., 2007）。
  - 5ヶ月児において、直視によるガンマ帯域の振幅の違いと名前を呼ばれて話しかけられたときのガンマ帯域の振幅の違いは相関する（Grossman, Parise, & Friederici, 2010）。
- 生後5ヶ月までの相互作用的な視線は、言葉の学習を促進する（Parise et al., 2011）。
  - 名前で呼ばれることは、オブジェクトへの注意を高めることに繋がる（Parise, Friederici, & Striano, 2010）。
  - 生後6ヶ月までの相互作用的な視線は、視線追従を促進する（Senju & Csibra, 2008）。
- 生まれたときから視線だけでなく、音（声）にも関心を示す（De Casper & Fifer, 1980）。
  - 特に、女性や母親の声に注意が向く。子宮の中での聴覚経験の結果かもしれない。
- 新生児模倣（舌出しなど）の研究は、生まれて数分の赤ちゃんが他者が自分に向けている顔や手先の動きに興味を持って見ており、その行動に反応しようとしていることを示している（Kougioumutzaki, 1998; Meltzoff & Moore, 1977）。
  - ただし、論争がある。

Having Others who Recognize them as Persons

- 赤ちゃんの行為に反応したくてたまらない、赤ちゃんに関心がある「他者」を利用できるかが重要。
  - 出生時、だいたいこの環境になっている。
  - これは、赤ちゃんを人（表情豊かで、感情的な存在）として認識していることがポイントとなる。
  - 赤ちゃんにとっても、他者からコミュニケーションを取ろうとしてもらえること、感情的な反応が返ってくることは、他者との関連についてのフィードバックとなる。
- 赤ちゃんを人として認識しているかどうか（人間性を認知しているか）を測る最もシンプルな方法
  - 必要なケアを行うだけでなく、対話的な声かけをしているかどうか。
    - 顔を合わせて赤ちゃんの注意を向けようとする（Trevarthen, 1977）。
    - 応答的な触覚的エンゲージメントが見られる（Kaertner et al., 2010）。
      - 声によるものもあるだろう。
  - 情動的な同調が見られるか。
    - 親たちの情動的同調の方法や程度は色々。
      - 情動ミラーリング（Legerstee & Varghese, 2001）
      - 随伴性のある笑顔（McQuaid et al., 2009）

    - 親自身の憂鬱が影響し、コミュニケーションのパターンを変えることも（Field, 1984; Murray et al., 1996）。
  - 赤ちゃんのやることに敏感で、関心を持っているかどうか。
    - 予期していなくても、赤ちゃんの声を聞いて反応する。

The Ability to Recognize Others' Recognition

- 赤ちゃんは生後4週までに自分の行為とその効果の間の随伴性を見つけることができる（Van der Meer et al., 1995）。
  - オペラント条件づけが早いことから明らかになった（Siqueland & Lipsitt, 1966）。
  - 顔の上で感じた行為と、モニターで見た行為の不一致がわかる（Filipetti et al., 2015）。
- 生後2, 3ヶ月頃までには、映し出されたもの（例えば、自分の顔など）がライブ映像か録画されたものかを区別できる（Bahrick & Watson, 1985; Reddy et al., 2007）。
- 赤ちゃんは、自分の働きかけに対する反応がないと、不機嫌になる。
  - 見慣れた人との良いエンゲージメントが中断された場合（Cohn & Tronick, 1983; Markova & Legerstee, 2006; Nagy, 2008）。
  - 行為と反応が一致しない場合（Murray & Trevarthen, 1985; Nadel et al., 1999）。
- 随伴性のある相互作用の質と、赤ちゃんのコミュニケーション可能性を大事にする程度は、短期的にも長期的にも重要。
- 赤ちゃんは人生の早い段階で会話的存在として認識されるていることをわかっている。
  - 他者の行為が赤ちゃん自身のとった行動と関連のある反応かどうかを認識することができている。

- 赤ちゃんが他者の行為を認知（隠れた心的状態の解釈を推論している）として理解しているかどうかは、難しい。
  - しかし、近年の4Eの考え方であれば、この問題について考えていけそう（Robertson & Johnson, 2009; Becchio et al., 2010, 2013）。
    - 心（mind）は身体化されている。
      - 心は身体が注意、意図、感情を表す手段
      - 心を概念化することは複雑で、発達的に後の方で達成されることである一方で、心を知覚することは、エンゲージメントの中で単純に達成することができる（Leudar & Costall, 2006; Reddy, 2008; Schibach et al., 2013）。
- 次の章では、2つの社会的認知の気づき（他者の注意と他者の意図）について、二人称関係のエンゲージメントの話と共に紹介する。

  - 赤ちゃん本人に向けられた注意や意図への赤ちゃんの反応
  - 赤ちゃんの行為に向けられた注意や意図への反応
- ポイントは2つ。エンゲージメントは、赤ちゃんの気づきを明らかにするだけでなく、赤ちゃんにとっても大人にとっても気づくべき新しいことを作り出す。
  - 初期のエンゲージメントは注意や意図の気づきにおける典型的な発達の道筋の重要なステップである。
  - エンゲージメントは感情的な関わりの深い相互作用を示す。

DEVELOPMENTS IN JOINT ATTENTIONAL ENGAGEMENTS

- ここで言う注意は、視覚的なものに限定する。
- 赤ちゃんは、自分に向けられた注意に気がつくだけでなく、感情的な反応（返事）をする。
  - 生まれてすぐ：視線そのものに興味がある。
    - 長い時間・頻繁に注視する（Farroni et al., 2002）。
    - 視線とその関連にも興味があるので、上手くエンゲージメントを得られないと不機嫌になる（Brazelton, 1986）。
  - 生後2ヶ月：他者の視線が笑顔やポジティブ情動を引き起こすようになる（Wolff, 1987）。
    - 感情的な反応がより複雑になる。恥ずかしそうな笑顔（coy smile）を浮かべるようになる。
      - 他者からの注意を注意として認識している。
  - 生後8ヶ月：ふざけたり、見せびらかしたりするようになる。
    - 自分の行動に注意を向けさせようとしている。

Positive Shyness or Coy Smiles to Gaze to Self at Three and Four Months

- 他者の笑顔の視線に対して恥ずかしそうな笑顔をし始めるのは、定型発達児で生後3ヶ月。
  - 大人がする、困ったような笑顔と関係するパターンで構成されている（Asendorpf, 1990）。
  - 最初はよく知っている大人との相互作用の中で出てくるようになる。そのあと、知らない大人に対して顕著に見られるようになる（Reddy, 2000; Colonnesi et al., 2013）。
  - この笑顔は、自閉症児では見られない（Hobson et al., 2006; Reddy et al., 2010）。
    - 発達的に年齢相応の鏡像自己認知（自己の概念の発達）ができても、照れ笑いができない。
      - 鏡像自己認知と、複雑な笑顔を見せることは別物。
- 先行研究（Lewis, 1995）では、恥ずかしがるといった反応は、自己の概念が発達してから生じると考えられていたが、定型発達児では逆。恥感情が先。

- 自己意識は、自己への注意に対する情動的な反応として始まるのでは。

- 他者の注意に対する感情的な反応は、従来考えられていた三項関係、共同注意（joint attention）に関与する可能性がある（Bates et al., 1976; Tomasello, 1999）。
  - 共同注意：指さしなどを通じて、対象への注意を他者と分かち合う。自分、他者、対象の関係を三項関係という。
  - もともと自分に向けられた注意によってのみ引き起こされていた感情の範囲が拡大し、より複雑な状況や「刺激」によっても引き起こされるようになる（Reddy, 2003, 2005, 2011）。

Clowning and Showing-Off from Seven or Eight Months of Age

- 生後6ヶ月くらいになると、他者が自分の行動に対して感情的な反応をしていることに気づき始める（Reddy, 1991, 2001; Mireault et al., 2011）。
  - ある表情、音、体の動きが、大人の笑顔やその他ポジティブな注意を引きつけることに偶然気がつく。
  - そのことに気がつくと、もう一度その反応を得ようとして、表情、音、体の動きを繰り返す（Reddy, 1991; 2005）。
- ふざける行動は、基本的に相互作用の関係にあるときに生じる。
  - 行動に気づき、笑ってくれる他者の存在が必要がある。
  - 他者が楽しんでくれることに喜びを見出せる必要がある。
    - 楽しんでもらえると、相手の行動や表情につながることに気づいている必要がある。
    - 行動や表情を繰り返すことで、もう一度相手の行動と表情を引き出せる必要がある。
  - 自閉症の園児では、このような感情的なエンゲージメントは不足する（Reddy, Williams, & Vaughan, 2002）。
    - 発達年齢が同じダウン症（染色体異常により、発達と知能に遅れがある）児では、不足しない。
  - 共同注意ができるようになる前の、注意の理解を広げる段階。
    - 他者は自分だけでなく、自分の行動にも注意を向けることを理解する。
      - 共同オブジェクトとしての赤ちゃんの行為・表情（Moll et al., 2007）。
- 大人の感情的な反応と、赤ちゃんが大人の反応をもう一度引き出そうとすることのシンプルな相互作用関係が、赤ちゃんが他者の注意の性質を利用するためには重要となる。

- 恥ずかしそうに笑うのも、ふざけたり見せびらかしたりするのも、人が他者の注意によって感情を動かされる・動かそうとするエンゲージメント。
  - ある年齢になると突如現れるのではなく、発達的にひと続きのもの。

- もし、赤ちゃんが他者の赤ちゃんに対する行為を認識しているだけでなく、他者が適切な反応をしてくれると予測するのであれば、行為の理解について理論化するに当たって、これらの反応を無視することはおかしいだろう。
  - 他者の反応：他者の意図的な行為

Anticipatory Adjustments to Being Picked Up at Two and Three Months

- 定型発達児は、よく知っている大人が自分を抱き上げるために近づいてくると、それを予測して自分の体を調整する（脚や腕を伸ばしたり）。
  - 実際に接触する前から調整をする。
  - 生後2ヶ月頃から見られる。3ヶ月頃になると、さらにスムーズになる（Reddy, Markova, & Wallot, 2013）。
  - 自閉症児には見られない（Brisson et al., 2012）。
  - 環境に対する手がかりというよりも、大人とのコミュニケーションのための行為
- 他のオブジェクトに向けられた意図的な行為を理解する前の生後2ヶ月の赤ちゃんは、自分に向けられた意図的な行為に対しては適切に反応できる。
  - エンゲージメント（自分に向けられた意図的な行為との関わり）は感情的に重要だから。

Compliant Responses to Others' Directives in the Second Half of First Year

- 家族・文化によっても異なるが、生後半年ぐらいから大人は赤ちゃんに対して命令の頻度を増やす傾向にある。
  - 禁止というよりも、ポジティブな行為やスキルの呈示を含む形で示される。
  - 経験によってぼちぼちではあるが、7〜8ヶ月くらいで命令に従い始める（Reddy et al., 2013）。
    - どの文化圏でも、6.5ヶ月から12.5ヶ月の間で徐々に命令に従う反応が増えてくる。
    - これらのエンゲージメントは、意図の理解における連続的・拡張的プロセスの一部であることが示唆される。
    - コミュニケーションを伴う相互作用は2歳にならないと理解されない複雑なことであると言われていた（Tomasello, 1999）が、それに反論するような現象。
  - これは、赤ちゃんが大人の意図や興味に参加することに関心を持ち始めていることを示している。

- 相手の意図に気づけることと、このような意図的なエンゲージメントは切り離せない。

CONCLUDING POINTS

- 社会的認知の理論家の多くが、社会的認知には相互作用やエンゲージメントが必要であると考えているが、意味していることは理論家によって様々。
  - Csibra & Gergely (2009)：コミュニケーションを通した学習の発達における明示的な手がかりの役割について検討
    - 名前を呼ぶなどの直接的な働きかけで、赤ちゃんの本来の注意バイアスが活性され、何が一般化できる知識かがわかるようになる。
    - つまり、直接的な働きかけは手がかりとなる。
  - このチャプターで紹介してきた先行研究は、他者の役割は赤ちゃんの世界に対する気づきに導く手がかりになることだけではないことを示している。
    - 感情的な関わりは注意や意図への気づきを促進する。
  - Michael Tomaselloたちの研究は、社会的認知の出現に関する議論の中心。
    - 共同エンゲージメント（共同注意、意図）が社会的認知で重要な役割を果たしている。
    - 他者が対象について知っていることを理解するには、まず大人と対象との実際の共同エンゲージメント、そのあと単純な大人と対象とのエンゲージメントの観察をする。
    - エビデンスは、ほとんどが9ヶ月以降に生じる三項関係に限定されている（Tomasello, 1999; Tomasello et al., 2005）。
  - このチャプターでは、9ヶ月よりも早い段階での二人称的エンゲージメントの認知が、行為に対して反応することの意味を認識させると紹介した。
- 社会的認知の十分な説明を提案するには、以下の説明が必要となる。
  - なぜ、赤ちゃんを認識論的な観察者・分析者役にしないのか。
  - なぜ、幼児期の後半まで社会的認知の説明をしないのか。
  - なぜ、エンゲージメントを単なる対象世界を知覚する手がかりの点から概念化しないのか。
- 社会的認知の起源を理解するためには、赤ちゃんと社会の直接のエンゲージメントを理解する必要がある（エンゲージメント大事）。
  - エンゲージメントの発生について
  - その発生の理由について
  - 感情的な関わりといった微妙な相互関係において維持されているような態度
- エンゲージメントという言葉も、曖昧で多面的だが、私たちの社会生活について重要なことを捉えている。
  - 本質的な曖昧さ：未知の現象の可能性を含む不確定性

- 他者の感情を関係づける能力、自分の認識を知る能力は発達の中心
  - これらの能力は、（自分と他者を）「同一視する」動的な過程を含むかもしれない（Hobson, 2002, 2007）。

- 赤ちゃんと大人の間の相互のエンゲージメントが社会的認知の発達に必要であるように、発達研究者と赤ちゃんの間の相互のエンゲージメントは社会的認知の理論の発展に必要。
  - エンゲージメントにおける赤ちゃんと大人の主観的な方向性に関する科学者の認識は、他者を理解しようと赤ちゃんに刺激を与えるものが何か、大人がそうさせるものは何かを理解するのに重要。
  - 発達研究は赤ちゃんとの対話が大事。